



## 今月のみことば 2015年9月

「…多くの人々が、イエスの行われたしるしを見て、御名を信じた。しかし、イエスは、ご自身を彼らにお任せにならなかった。なぜなら、イエスはすべての人を知っておられたからであり、また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。」(ヨハネの福音書 2章23～25節)

第二次世界大戦でイギリスを勝利に導いたウィンストン・チャーチルと言えば、多くの人々は歴史上まれに見る傑出した人物である、と賞賛を惜しまないことだろう。戦後はノーベル文学賞まで授与され、名誉のうちのこの世を去った。国葬には英国女王を始め、各国元首や指導者、そして市民32万人が参列した。

それに対して、アドルフ・ヒトラーと言えば、ユダヤ人六百万人の殺戮を始めとして、ヨーロッパを恐怖に陥れた悪の権化と見なされている。敗北が決定的となり、最後は地下壕で自殺をとり、その死を悼む者はないに等しかった。ヒトラーが率いたナチスの残虐な記憶は、戦後七十年経った今も生々しい。

どちらが善人か、悪人か、という判断で迷う人はいないと言っているのではないだろうか。

ところが、近年出版された研究書(『チャーチルの秘密の戦争』)によると、第二次大戦中のインドのベンガルで三百万人とも言われる人々が餓死したのは、宗主国イギリスの首相チャーチルが意図的に飢餓を起こしたため、という。

米国からの食糧支援の申し出も船舶不足を理由に断り、オーストラリアからの豊富な穀物もインドを迂回させて、すでに食料が充足している地中海地域に運ばれた。数次にわたる連合国からの食糧支援計画も、最後の段階でイギリス政府の抵抗に遭って頓挫した。

根本には、チャーチルがインド人を嫌っていたこと、特にガンジーを嫌悪していたことが本人のことばからわかっており、抜きがたい人種的偏見があった、とベンガル人の著者は指摘する。

そしてこの大飢饉でこれほど多くの餓死者が出たことに対してチャーチルが責任を問われることも糾弾されることもついになかった。

神の目から見たとき、人類史における英雄チャーチルも、史上最悪の人間の一人とみなされるヒトラーも、実は大きな違いはないのかもしれない。そして実は私たちも…。

キリストの贖いがなければだれもが似た過ちを犯す危うさと隣合わせなのである。

